

俺の父がお礼を兼ねた食事会をしないと、ルルを誘ったのが昨夜のこと。

目が覚めた俺は自分の部屋にいることを思い出し、身支度を整えた。少しだけ名残惜しさを感じながらも、自室をあとにする。俺たちは今日、薬屋リーファへ戻るのだ。

「おはよう、ツバメ」

「おはよう」

門前で、ルルは待っていた。

「早いね」

「自然と目が覚めたのよ」

「枕変えると眠れない人？」

「そう、なのかしら。あまり外泊をしたことがないの」

そんな会話をしていると、家の前に黒いキャビンの馬車が止まった。これは家が所有するものだ。

来るときは乗合馬車<sup>のりあい</sup>だったけれど、帰りはゆっくり帰れるようにと父が手配してくれた。

俺のエスコートでルルが馬車に乗り込み、続けて自分も乗った。

御者<sup>ぎょしゃ</sup>が馬車を出す。

遠ざかっていく家からなんとなく、目をそらすことができずにいた。

「……残ってもよかったのよ」

「ううん。今の俺は、リーファの庭師だから」

目の前に座るルルが胸をなでおろしたように思えた。

「ルル。本当に、ありがとう」

「昨日の夕食のときに、さんざん聞いたわ」  
「それでも、何度言葉にしても足りない気がしてさ」

母のこと。  
薬のこと。  
そして、俺を許してくれたこと。

「ツバメが正直に話してくれたから、私もそれに応えたのよ」



ツバメの視線が少しだけさがった。

「なんだか、ルルがしていることがわかった気がする」  
「私のしていること？」  
「本心を伝えれば、相手にもきっと届く」

それはあの夏の日、ツバメに伝えたことだった。

「俺の言葉を、本音を、受け止めてくれてありがとう」  
「それは——」

ツバメの本心を聞いたから、許そうと思った。  
でも、本当はそれだけじゃない。

「ルル？」

言いよどむ私に、ツバメは不安そうな顔をする。  
違うのよ。  
私、あなたには——。

「ツバメ。どうか、笑っていて」

「……え？」

「私があなただけの気持ちを受け止めたことも、あなたにそう願うことも……」

膝の上に置いた手に、力がこもる。

「あなたのことが、好きだから」

こはく  
琥珀色が大きく見開かれた。

「好きだから、受け止めたと思ったの。あなたの気持ちも、本心も。まっすぐに伝えてくれてありがとう」

ツバメの瞳に光が増す。

こぼれ落ちそうなそれに、私はポケットからハンカチを差し出した。

「ごめん、俺……」

「謝らないで。大丈夫」

それは、あの夏の日、私を支えてくれた言葉。

「ハンカチ、洗って返すね」


「そのままでいいのよ？」

「だめ。ルルがそうしてたから」

目を細めて笑う彼に、私も小さく笑った。

ツバメはハンカチを見つめながらこぼした。

「俺、君にふさわしい人間になりたいな。傷つける人じゃなくて、守れる人になりたい」



「……もうなってるわよ」

「まだ足りないよ。……足りない」

そうつぶやくあなたが、どれだけ私を支えてくれたのかなんて、  
きっと知らないのだろう。

だからこそ私は、何度でも伝えたい。

あなたがいてくれるだけで、こんなにも強くなれることを。

春のようなあたたかさを胸に、私はそっと目を閉じた。

エンディング F【巡る愛のカタチ】